

劇団カミヒトエ「いつか来た道」講評

冒頭、観客にセリフで「あなた」と観客に語りかけてくるのが物語終盤まで、興味を持って観劇する仕掛けとして成立していて今作の朗読劇のスタイルの入り口として効果的だったように感じた。そして朗読劇は、限られた装置の中上演される事が多い。つまりそれは舞台上に情報として何を置くかが重要になってくる。照明や音響が次々変わるの、想像力をかきたてよかったようにおもう。飽きさせない工夫や場所が変わったことを教えてくれた。そういった様々な工夫の上に「文字を追う」という俳優への仕掛けがもう一工夫あると良いように感じた。メールでのやりとりが頻繁にあったが、台本ではなく例えば”スマホ”や”携帯”上の文字を追う事で、視覚情報をひとつお客さんに渡せはのではと思う。この「文字を追う」という行為自体が本ではないところがあると朗読公演としての新たな可能性が広がったように思う。この新たな可能性をどこまで追求するかであるが、更にスリリングにするためには例えば「真っ暗」にして朗読するシーンがあったらどうだったろうか。ふみの病気が発覚したシーンで突然、朗読中であるが「真っ暗」にするのである。「文字を追う」という行為が奪われる。しかし物語やダイアログは進行する。真っ暗な中から言葉が飛んでくる。観客は驚き、再び明かりがつく頃には更に前のめりになっていることだろう。そういった「読む」行為を「視覚的」に観せるための一工夫があると、目の前の俳優の質感が伝わって来るかもしれない。

他にも椅子の座り位置は、センター中央の椅子に「ふみ」が座るのがよかったのでは？と思った。というのも、ストーリーの重心と舞台上の重心としてラストシーンに行くにつれ舞台の上手を観ている時間が多いように感じた。センターに「ふみ」がくる事で、「ふみ」を取り巻く物語ということや物語の仕掛けが更に面白くなったのでは、と思う。

こういった工夫による”可能性”が積み重ねられることで「働きながら続けられる劇団」の活動への期待として素敵なものになると思いました。